

はじめに

私が、アジア経済研究所の現地調査事業として初めてシンガポールへ行ったのは一九六六年一月末であった。その約二年半前から研究所の動向分析部に所属しシンガポール・マレーシアを担当国として、同地の新聞を読み続けていた私は、李光耀とその人民行動党がマレーシアの一州となったシンガポールを切り盛りし、クアラルンプルの中央政府と抗争を続け、結局同連邦を去っていく様を、驚きの連続で観察していた。

人民行動党の有能な首脳陣による賢明かつ効率的な行政、各種族平等の政治理念、急速な経済発展などがクアラルンプルに脅威を与え、結局俱に天を戴けない状況となり、放逐された、という印象であった。しかし実際に現地で見聞きしたものは、全く違っていた。シンガポールの経済発展はまだ緒についたとは言い難いほどであり、町は植民地時代以降なにも発展がなかったかのごとく黒ずみ、そここにマレー人青年が何をするでもなくたむろし、ジュロン工業団地は赤茶けた土がむき出しのままであった。正直に言って、失望を感じざるを得なかった。

しかしその後の経済発展は、万人が認めるものとなった。いくつかの好運に恵まれたが、それを確実なものにしたのは指導層のたぐいまれな有能さによるものと言つてよい。

だがこの経済発展の背後で、私にはどうも不安が残る。それは李光耀ら指導層が主張してきたマラヤ固有の種族問題の解決方法としての「非種族主義」イデオロギーが変質し、華人が圧倒的に優勢な国家が生まれてしまったことである。一九六〇年代前半までには見られていた種族格差のない社会を作ろうという諸種族の情熱は失せてしまった。もちろん、世界中どこでも種族問題の解決は困難であり、このことでシンガポール政府をむやみに批判・非難することは当たらない。むしろシンガポールの今日の種族間平和は、同政府の成果とさえ言える。

にもかかわらず今日のシンガポールがますます「華人だけの国家」になりだしていることに、私は不安を感じる。しかも各種族は、等しくシンガポール人意識を持つ前に、種族それぞれのアイデンティティを持つよう仕向けられだしている。とくに華人は「アジア的価値論」の再興の中で儒教への回帰を求められている。シンガポールは、結局国民統合意識のない移民国家の道を歩むのだろうか。この状態で、もし近隣のマレーシアやインドネシアに再度の種族紛争が発生すれば、それがシンガポールに及ぼす影響には見過ごせないものを予感せざるを得ない。

私は、シンガポール現代史を書く機会を与えられ、一九六〇年代から持ち続けてきたこうした問題意識を念頭に取り組んできた。まだまだ不満足であるが、せめて今後も研究を続け、欠を補いたいと考える。